様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２８日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：20530440
研究課題名（和文）　〈悪〉のグレースケール形成に関する社会学的研究

研究課題名（英文）　Sociological Study of Formation of the Grayscale of Badness

研究代表者
高橋　征仁　（TAKAHASHI　MASAHITO）
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：60260676

研究成果の概要（和文）：本研究では、青少年がどのようにして、様々な＜悪＞の観念を分別し、理由付け、序列化していくのかについて、社会調査データを通じて明らかにした。主な知見は以下のとおりである。(1)青年期における規範意識の弛緩は、20 歳前後をピークとするユニバーサル加齢曲線を描く。(2)弛緩する規範は、性や自己決定に関する内容が中心であり、公正や危害の規範はほとんど変動しない。(3)性的発達がスイッチとなり、規範意識の柔軟化や序列化が進行する。(4)こうした青年期の変化は、ヒトの社会性や道徳性を高次化させる適応戦略の一つとして進化論的に捉えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we have focused on the process in which adolescents classify, reason and order various conceptions of badness, based on the social survey data. Our major findings are as follows: (1) Relaxation of moral strictness reaches a peak at about 20 years old, which depicts a universal age curve. (2) Relaxation does not occur concerning norms of justice and harm, although norms of sex and prudence are normally relaxed. (3) Sexual development set off this moral relaxation and ordering. (4) From the evolutionary point of view, this adolescent phenomenon can be explained as an adaptive strategy which enables human beings to make a higher level of social order.
.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：　社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：社会化、青少年、悪、非行

１．研究開始当初の背景

本研究は、人々がどのようにして、様々な＜悪＞の観念を分別し、理由付け、序列化していくのかについて、社会学的な見地から実証的に明らかにすることを目的としていた。社会化やアイデンティティ形成をめぐる研

究は、これまで、一定の善さや望ましさ、正しさの観念に準拠して構築されることが多かった。これに対して本研究では、むしろ、人々が行為や出来事についてリフレクションを行う基点となる＜悪＞の観念に照準を合わせ、その形成メカニズムの解明を課題とした。そうすることで、日常行為者のより現実的な選択や正当化のプロセスに目を向けた道徳的社会化論を再構築することができると考えた。

研究代表者は、それまでの調査研究を通じて、日本の青少年の非行観が、単純な善悪二元論から、より精緻化された複合的な序列（＜悪＞のグレースケール）へと非可逆的に再組織化されてくることを明らかにしていた。また、こうした＜悪＞のグレースケール形成が、日本や台湾などでも共通にみられることも明らかにした。こうした知見に基づいて、本研究では、社会調査データに基づきながら、悪のグレースケール形成のプロセスとメカニズムの解明に取り組んだ。

２．研究の目的

本研究は、青少年がどのようにして、様々な＜悪＞の観念を分別し、理由付け、序列化していくのかについて、社会調査データに依拠しながら、次の点を明らかにすることを目的とした。

(1) 普遍性と個別性：比較文化的な調査研究によって、＜悪＞のグレースケール形成をめぐる文化的共通性と差異を経験的に明らかにする。

(2) 道徳意識のモジュール性：広範な＜悪＞の観念に着目することで、道徳意識の多元性と重層性を理論化する。

(3) プロセスとメカニズム：縦断的調査研究によって、＜悪＞のグレースケールの発達的生成と時代的変容のプロセスを明らかにする。

(4) 知見の教育的応用：＜悪＞のグレースケール形成についての知見を、学校での道徳教育や矯正教育、裁判員制度などへ応用する可能性を検討する。

３．研究の方法

本研究では、予算の都合から、本格的なパネル調査や比較文化調査は断念せざるを得なかった。しかしながら、国内外の社会調査データアーカイブの２次分析や留学生へのインタビュー調査を通じて、予想以上の成果を上げることができた。

４．研究成果

(1) ユニバーサル曲線：本研究の最大の成果は、青年期における規範意識の弛緩が、20 歳前後をピークとするユニバーサル加齢曲線を描くことを明らかにした点にある。また男

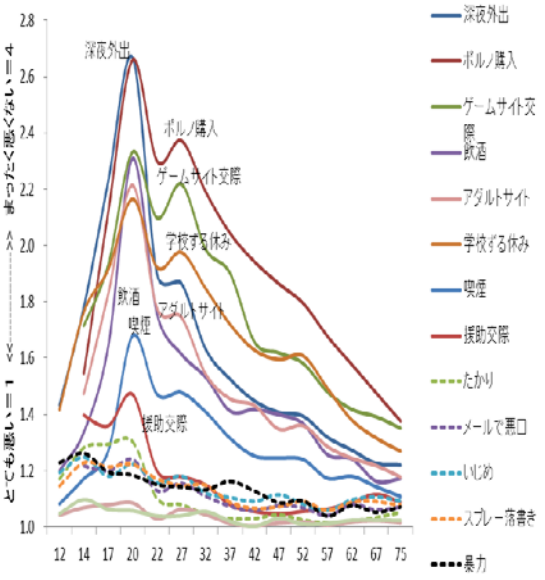

図1. 青年期における規範意識の一時的な弛緩とその後の厳格化

女で弛緩の度合いは大きく異なり、女子は男子のおよそ 1/2 である。こうした加齢変化と性差は、殺人率などの犯罪データとも符合するものであり、弛緩している規範内容からみても、背後にテストステロンの関与が強く示唆される（図１）。

(2) モジュール性：弛緩する規範は、性や自己決定に関する内容が中心であり、公正や危害の規範はほとんど変動しない。このことは、規範意識の弛緩が直接的には性メカニズムの一環であり、攻撃性や犯罪行動と直接結びつくものではないことを示している。こうした知見は、青年期に急増・急減する犯罪が特定の類型に限定されることを主張している Moffitt 仮説とも合致する。さらに、こうした規範意識のモジュール性は、政治意識の中にも見出すことができる(図 2)。

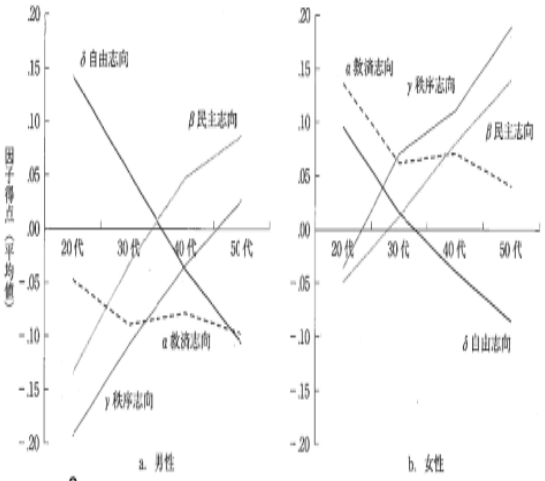

図 2 4 つの政治的志向の強さ（因子得点）の年代別比較（ISSP 2004; 男女 20-59 歳）

(3)プロセスとメカニズム：規範意識の弛緩プロセスが、性において最も早く急激に生じていることから、性的発達がスイッチとなり、規範意識の柔軟化や序列化が進行すると考えた。少なくとも共時的データで見る限りは、性規範が、規範意識全体を弛緩させているのではなく、自己危害や他者危害への感覚を鋭敏にさせ、規範の序列化を促進していた(図3)。

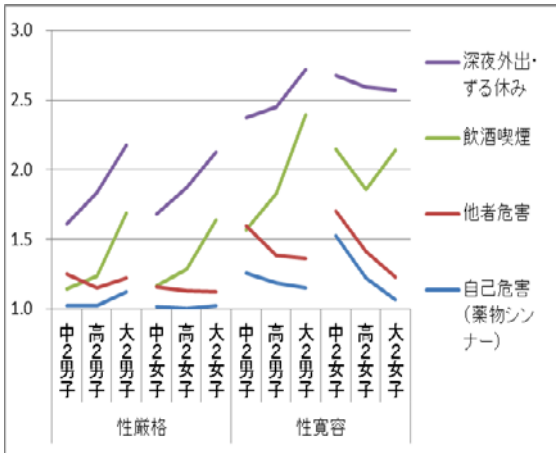

図3. 性規範の寛容化と規範の類型化・序列化

(4)進化論的パースペクティブ：上記の知見から、青年期の規範意識の変動が時代変化や道徳教育のたんなる反映ではないことが明らかになった。むしろ、青年期における規範意識の弛緩は、ヒトの社会性や道徳性を高次化させる適応戦略の一つとして進化論的に捉えられる。時代変化や道徳教育の影響は、こうした系統発生的基礎の上で分析・検討されなければならないだろう。

(5)道徳教育へのインプリケーション：規範意識の柔軟化や高次化のプロセスにおいては、性をめぐる自己統制の経験が大きな役割をしていることが分かった。したがって、青年期の規範意識の揺らぎを社会的に有意義な活動へと結びつけていく社会的機会の提供が非常に重要であると指摘できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計８件）

① 高橋征仁、青少年問題をめぐる虚実～忘れ去られた＜進化＞への問い、山口大学文学会志、62、65-89、2012、査読無
② 高橋征仁、政治意識のモジュール性と政治文化、社会と調査、7、26-33、2011、査読有
③ 高橋征仁、若者の政治的無関心は本当か？―世代間断絶と社会秩序の高次化に関する考察、東京大学社会科学研究所編『ISSPを用いた国家・市民権・政府の役割に関する国際比較分析』報告書、54-69、2011 、査読有
④ 高橋征仁、社会病理学への領域固有アプローチ、現代の社会病理、25、57-75、2010、査読有
⑤ 高橋征仁、＜男らしさ＞の行方～青少年の性行動における記号化と分極化、性の健康、18-2、33-39、2010、査読無
⑥ 高橋征仁、社会統計でみる＜草食系男子＞の虚実～欲望の時代からリスクの時代へ、現代性教育研究月報、28-1、1-7、2010、査読無
⑦ Masahito Takahashi and Mei-Ling Wang, A Comparative Survey of Adolescent Relativism, The 2009 Asia-Pacific Forum on Sociology of Education, National University of Tainan, 821-824, 2009, 査読有
⑧ 高橋征仁、現代青年の時間的展望における発達的変化と時代的変容、社会分析、35、39-57、2008、査読有

〔学会発表〕（計 22 件）

① 高橋征仁、文化と遺伝子の共進化に関する一考察、第４回日本人間行動進化学会、2011 年 11 月 19 日、北海道大学、札幌市
② 高橋征仁、青年期における悪のグレースケール形成、第１回社会神経科学研究会 2011 年 10 月 6 日、自然科学研究機構岡崎、岡崎市
③ Masahito Takahashi, Adolescent Relativism Revisited, The International Society of Criminology, 2011 年 8 月 5 日, 神戸コンベンションセンター、神戸市
④ 高橋征仁、ISSP国際比較調査にもとづく政治的関心のマルチレベル分析、第 26 回山口地域社会学会、2011 年 3 月 5 日、山口大学、山口市
⑤ 高橋征仁、若者の政治的無関心は本当か？ 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブセンター共同利用・共同研究拠点事業二次分析研究会 2010 成果報告会、2011 年 2 月 4 日、東京大学、東京都文京区
⑥ Masahito Takahashi, Moral Panics as Autoimmune Diseases, Moral Panics in the Contemporary World, 2010 年 12 月 11 日, Brunel University, UK
⑦ Masahito Takahashi, Modularity of Mind and Multiple Modernizations,第 83 回日本社会学会テーマ・セッション「日本と東アジアにおける多元的近代」, 2010 年 11 月 6 日,名古屋大学,名古屋市
⑧ 高橋征仁、コミュニケーション・メディアと若者の性、日本性科学連合第 12 回性科学セミナー講演、2010 年 10 月 16 日、倉敷市アイシアター、倉敷市

⑨ 高橋征仁、社会化研究における相互性の問題 第62回日本教育社会学会大会テーマ部会「社会化研究の最前線Ⅱ」、2010年9月18日、関西大学、吹田市

⑩ Masahito Takahashi, An Immune System Model in the Research of Moral Socialization, XⅦ World Congress of Sociology, 2010年7月13日, Göteborg Convention Center , Sweden

⑪ 高橋征仁、欲望の時代からリスクの時代へ～時間的展望に関する格子状構造化アプローチ、第68回西日本社会学会大会課題研究、2010年5月22日、福岡県立大学、田川市

⑫ 高橋征仁、大学生における時間的展望と時間感覚、山口大学イブニングセミナー、2010年1月8日、東京工業大学、東京都港区

⑬ 高橋征仁、道徳的社会化論の展開、第118回日本社会分析学会、2009年12月19日、九州大学、福岡市

⑭ 高橋征仁、迷走する社会化の理論、第22回山口地域社会学会研究例、2009年11月14日、山口大学、山口市

⑮ 高橋征仁、社会化研究における免疫モデルの可能性、第61回日本教育社会学会大会、2009年9月11日、早稲田大学、東京都新宿区

⑯ Masahito Takahashi, Orality and Literacy, The 19th Congress of the World Association for Sexual Health, 2009年6月21日, Göteborg Convention Center , Sweden

⑰ Masahito Takahashi & Mei-Ling Wang, A Comparative Survey of Adolescent Relativism, The 2009 Asia-Pacific Forum on Sociology of Education, 2009年5月7日, National University of Tainan, Taiwan

⑱ 高橋征仁、青年期の相対主義に関する日台比較研究、淡江大学学術講演会、2009年5月5日、淡江大学、台湾

⑲ Masahito Takahashi, A Grayscale of Badness among Japanese Adolescents, Meeting on Adolescent Development, 2009年3月16日, UC Berkeley, US

⑳ 高橋征仁、道徳・欲望図式の転換、第81回日本社会学会大会、2008年11月23日、東北大学、仙台市

21 高橋征仁、コールバーグ＝ギリガン論争の遺産、第60回日本教育社会学会、2008年9月20日、上越教育大学、上越市

22 高橋征仁、道徳的社会化論の展開、第55回東北社会学会大会 2008年7月19日、福島大学、福島市

〔図書〕（計　１件）

① 海野道郎・片瀬一男・高橋征仁ほか、有斐閣、＜失われた時代＞の高校生の意識、2008、59-91

〔その他〕

ホームページ等

（「理由なき反抗」の理由）

http://www.hmt.yamaguchi-u.ac.jp/?p=5514

６．研究組織

(1)研究代表者

高橋　征仁　（TAKAHASHI　MASAHITO）

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：60260676